

「子ども達の危機を救うために・・・今できること」

園長 高杉 美稚子

時の経つのは早いもので、はや、前期後半を迎えました。今期も「子ども達のより良き成長のために」一生懸命、心をつむいでいく所存でございますが、前期も私達が努力する以上に、大人が心を砕く以上に、子ども達の方が成長し、又、子ども達に教えられた年度はじめてであった気がしています。

時として、子ども同士の育ちあいの中から発せられる言葉にはっとさせられ、気づかされることもあります。集団の中で育っていくエネルギーやパワーの素晴らしさ、それは、教師のどんな導きより深広で、大人の必要以上の心配や干渉も吹きとばす力強さを持っています。そしてその集団の中の子ども達の育ちの姿が、教師としての喜びでもあります。

私たちは、常に「集団の中の教育のプロ」でなければと思います。知的愛情を持って、目先のことにとらわれず、問題の奥底にあることをしっかりとらえて教育にあたっていく、その為には、大きな視野で物事をとらえ、あせらず、じっくりと「待つ姿勢」が大切と考えています。

あせらず、この「待つ」ということは簡単な様で、とても難しいことかもしれません。以前読んだ本の中で、「ヒトはなぜ子育てに悩むのか」ー正高信男著ーその中にもこんな文章が載っていました。

「わが子にどのように接してよいかわからない」と言った育児不安が多い、集団の中での子どもの育ちを理解出来なく、子どもとのつきあいかたが、良く判らない大人が増えていること、にもかかわらず「子育ては上手くしなくては」という、心理的プレッシャーが強く働いていることだ、とあります。

この本には、子どもたちの成長に負けない為に、大人がもういちど、発達を遂げる為の道標が書かれています。

最近、「生涯発達」という言葉を頻繁に耳にするようになってきました。今や、発達というのは、子どもが大人に成る過程だけをさすのではなく、文化の価値、規範を習得し、真の人となっていく事全てをさしていると考えて良いと思います。

その為には、自分の文化以外のものを認めていく事が最も大切な事ではありますが、「個々人の持つ文化、考えこそがすべてという発想を、なにがしかの意味で超える事を可能にする再有力の人生上の行程が、子どもを見つめる事にある」とこの著者はのべておられます。

育児というのは、大人が生涯に渡って発達をし続ける過程の中で他にはとってかわるもののないほど素晴らしい行程であり、子どもをみつめることで、自分をとらえなおす大きな契機です。 子ども自身の論理に従ってさぐろうとしてみる、そういう「子

育てのおもしろさ」を身につける事によって、子育ては大人みんなにとって「自分自身のための子育て、ひいては自分育て」に繋がっていくのです。

そう考える時、今、身近に子育ての対象になる幼児を持つ親、そして、常に、子どもたちが回りにいる私たち教師は、何と幸福な人間なのでしょう。

子どもの姿を通して、もう一度成長する、真の父親、母親、教師、人になっていく、それは、何と素晴らしい事であるかということを認識する事からはじめていきましょう。そして、子どもと共に成長出来る私たちでありつづけましょう。

子ども達の為にも、私たち自身の為にも。

さて、この夏休みも犯罪の低年齢化、凶悪化が進んで、心いためることが多かった日々でした。でも、最近の子どもを持つ親の心配は、自分の子どもの命を心配する以上に自分の子どもがいつ犯罪者になるかという恐怖があるとさえいわれています。この子ども達の危機を食い止めるために私達大人はどうしたらよいのでしょうか。そしてどうやって、子どもと一緒に成長できる親であることが出来るのでしょうか。

子ども達の危機、一つには、家庭の教育力の低下が言われています。子育てで気にかかるといわれているのは、具体的には 1、受容とわがままの区別がつかない。2、基本的生活習慣を身に付けさせることへの配慮が弱い。3、しっかり遊んでいない。3、授乳や、食生活に無頓着である。5 子どもに過保護、過干渉である。といわれています。親の養育態度で不安な点を要約してみると、第一には、子どもの基本的生活習慣づくりの意義がわからず、「食べる」「寝る」「遊ぶ」という基本的しつけがおろそかにされていることです。第二には、子どもに対して、愛情を感じる事が出来ずに悩んだり、何を話しかけていいのかわからずに戸惑うなど、親になった動揺が浮き彫りにされている、そこから子どもを私物化する気持ちが生まれ、幼児虐待の土壌も形成されています。第三には親同士がコミュニケーション不全に陥っており、お互いに孤立した子育てを余儀なくされている点です。

この現状では、子どもが家庭で安心して生活したり、親に甘えられる現状ではありません。無表情のサイレントベビーがいまや乳幼児の3%近くにも達したという事実もうなづけます。なぜこのようになってきたのかをその世代が共通に経験してきた育ちから考えて見ると「家庭のホテル化」があります。家の手伝いをしない、などに見られるように、家庭が家族の共同生活の場ではなくなっていることが上げられます。携帯電話の普及、テレビの個人所有化、孤食の広がりにより、家族共同体の崩壊が起きているのです。

次に地域の教育力の低下も言われています。地域の共同性が崩壊したり、未形成な地域では、親の子育て機能を十分に発揮できません。それはなぜでしょうか。一つには、子育ての工夫や知恵が地域の日常生活を通して伝承され各家庭に創造的に取り込まれる機会が奪われるからです。二つ目には、親が子育ての悩みを抱えても、相談する相手がなく、ストレスが増すからです。三つ目には、地域での位置を失ったそれ

その家庭はお互いにつながりを持たずに浮遊しています。地域社会が持っていた慣習や常識が我が家を通じて子どもに教え込まれることがなくなってきました。そんな中で、親の負担は更に増大しています。

そして第三に学校の教育力も落ちているといわれています。小中学校で問われているのは、児童に対する、評価の問題と指導の問題です。教育実践に欠かせないはずの指導と評価が子ども達に大きなストレスを与え、今日の子どもの危機を生み出す原因となっているとすれば、学校とは何か、教育とは何かを特に公教育の現場では今一度問い直されなければならないでしょう。

さて、このような背景の中で、どうして、子ども、それも普通の子といわれる子が切れていくのでしょうか。東京都の調査によると、教師よりも友達関係の中で切れていることが多いという結果が出ています、しかし、どれも切れるには、小さな出来事が多いのです。つまり、問題は、切れるその前にその小さなことを解決する手立てを持っていないという結果なのです。

では、子ども達が実際にむかついたときにとった行動は何があったのでしょうか。三種類に分けられるそうですが、1には相手や自分を攻撃することです。2には、自己防衛をして感情を閉鎖することです。3にはセルフコントロールをすることです。しかし、3の方法を取った子どもは0.5%しかいませんでした。1のように攻撃性のあるのは、一見厄介ですが、小さな爆発をするので、あまり怒りがたまりません。もっとも厄介なのは、2です。このままいけば、引きこもりになるか、よりいっそうの心的ストレスをためて爆発してしまうのです。このように見てくると、切れるきっかけになる原因はそれほどゆがみはなくても、その感情を上手にコントロールしたり、コミュニケーションによって問題を解決できないために攻撃的で、短絡的な形で、暴力が噴出していることになります。

なぜ、暴力なのでしょう。なぜ、子ども達は、むかついたときに言葉によって、自分の感情を伝え、相手とのやり取りの仲で自分のむかつきを取るプロセスを取れなくなっているのでしょうか。

これも六大都市の研究にその結果が出ています。とりわけ東京の子どもの結果が低いのですが、それは何かというと、自己評価が低いのです。この自己評価が低いというのは、自尊感情が育っていないということです。自尊感情が高ければ、いかに状況が悪くても、単純に切れることは少ないと考えられます。なぜなら、常に自分が受け入れられているという安心感や精神的な充足感が大きい為に、爆発的な感情表現や攻撃的行動によって、自分の心の落ち着きどころを求める必要がないからです。

では次になぜそこまで子ども達の自尊感情は、損なわれているのでしょうか。そのことについては早稲田大学で調査をしています。その一番の原因は、「良い子を演じるストレス」が大きく子どもの発達をゆがめているという結果でした。良い子ばかりか良い子になれなかった子どもも抑圧され、ゆがめられているということです。

社会心理学者エーリッヒ・フロムは、その著「悪について」の中で、人間は、周囲の状況によって、完全に受身の状態にされることは耐え難いことだと指摘しています。彼は「この世に、自己の足跡を残し、変貌し変革しようという気持ちにかられている」とし、これが抑圧されるとその代償として、力を持った集団に同一化するか、逆に破壊的な行為に至ると述べています。これが暴力であり、無力であることに対する生の半逆だと述べています、これこそが切れる心理です。

さて、では我が子を犯罪者のしないためにはどうしたらいいのでしょうか。ここまでは、尾木直樹著「子どもの危機をどう見るか」を参考に述べてきましたが、もう、賢明な保護者の方は、お気づきのことでしょう。

今年の 6.7.8 号の巻頭言にその答えはあるのです。だから、「過干渉・過期待」が怖いのです。過干渉・過期待はすべて親の善意から出発しています。だから、親は気づかないのです。でも善意だからこそ逃れられなく、子どもは真綿で優しく包まれるように苦しむのです。そして切れていかざるを得ないのです。

家庭だけでは出来ないこともあるでしょう。だから、「ドリカムタイム」が始まったのです。夏休みの事件を聞いて、不安になったお母さん、もう一度 6.7.8 月号を読み返して下さい。そして、出来ることから出来るだけでいいのです、実践しましょう。そのすべを既にお母さんは知っているのですから。悩んだらまず行動です、行動することによってやる気呼び起こすことが出来ます。まず行動してみることも大切です。

「行動しないで後悔するより行動して反省する人になりましょう」

でないとそのすべを知っているがゆえに後悔は大きくなります
無理しなくてもいいのです。少しずつ、出来ることから出来るだけ、自分らしく、自分のスピードで……。食べ始めたらいつかチーズはなくなります。でも始めなかったら、永遠にそのままです。

教育は特別に見えないくらい薄い紙を重ねるようなものです。でも、始めればいつか重なって行きます。そしてかさが増え、臨界点に達するのです。一緒に始めましょう。今日から……。さあ、又新学期が始まります。共に頑張りましょう。かわいい子ども達の為に。そしてかわいい子ども達だから、少し力をぬいて。ゆっくりと。

自分が子どもだったころのことを忘れずに。

「大人はみな、始めは子どもだった。でも、そのことを忘れずにいる大人はいくらもない。」サン＝テグジュペリの言葉ですが、吉塚幼稚園の先生と保護者は子どもの心を持続けている、そのいくらもない大人のひとりひとりでありたいと思っています。